

僕たちがこの小屋にきて七日目の朝。
マリーが外へ出てくると同時に、すべての作業が終わった。
——道が、開いた。

「おはようございます」

「マリー、終わったよ」

「……はい、ありがとうございます」

開通した道を見つめたマリーは、意を決したように言う。

「私、魔女になります」

早朝の涼しい風が、僕たちの間を吹き抜けていく。

「スマレはどうしますか？」

「僕は……」

握りしめた拳が痛い。


しかし、それを解くことができずにいる。

「僕は君が魔女になっても、まだ、一緒にいたいと思ってる」

あれほど魔法を扱う者に対して抵抗があったのに、マリーが魔女になっても、傍にいたいと思った。

「私も、スマレが傍にいてくれたら安心できます」





「本当に？」

「はい。あの雨の夜からずっと、そう思っていました」

「そう、か」

「それじゃあ、朝ごはんを食べませんか？」

「その前に体を洗わせて」

「もちろんです。昨日食べ損ねてしまったので、スマレのご飯が食べたいです」

「うん。わかった」

「なにか手伝えることはありますか？」

「じゃあ、鍋にお湯を沸かしておいて」

「わかりました！」

マリーは微笑みを残し、小屋へ戻っていく。
僕は井戸水を汲み、土だらけの体を流した。




テーブルに座り、スマレと向かい合ってご飯を食べる。
彼のご飯を口にすることも、この光景ももう見られないと
思っていた。
だから、私といたいと言ってくれたときは、どうしようも
なくうれしくて。

二人でくつろぎ、話をしていたらもう日が天頂へ向かう時
間になる。

「行ってきますね」





スマレには小屋で待っててもらおうようお願いをして、外で司祭を待つ。

やがて、森の奥には不釣り合いな白いローブを着た司祭が三人、やってきた。

「マリー様、お久しぶりです」

「はい」

「これから魔女の儀をはじめます。ついてきてください」

そうして、辿り着いた先で儀式がはじまった。

文字が書かれた石板に乗り、私は祈りを捧げるような姿勢をとる。

司祭たちが私を囲むように立ち、口語とも違う言葉を唱えた途端、肩が熱くなった。

その熱が体中をめぐる、頭の中に、言葉が浮かんでくる。

『雨を降らす魔法、傷を癒す魔法を授ける』と。

そうして儀式が終わると、感覚で理解した。

魔法の使い方、そして、その解き方を。



小屋に戻ってきたマリーは僕に駆け寄ってくる。

「儀式は無事に終わりました。私も晴れて魔女になりましたよ」

「そっか、おめでとう」





「ありがとうございます」

「全然変わった感じはしないな」

「本当ですね。でも、スマレ。今の私なら、あなたにかけられた魔法を解くことができます」

「本当に……？」

聞き返すと、マリーの瞳が少しだけ伏せられた。

「はい。スマレはどうしたいですか？」

魔法を解けば、人に戻ることができる。

虐げられることもなく、ありのままの時間を生きることができる。

魔法を解くか、解かないか、僕たちは話し合うことにした。



「決めたよ」

僕は机の上に組んだ手に力を込めた。

